



これでやっと

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 秀男 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9341

これでやっど



阿部 秀男

教官で昨年退職されたのは奥野先生、それに定年を2年「繰り上げ」の榊原先生のお二人だった。二人とも退職期に近づくとつれて足取りも軽くなって行く様子に「怪しさ」さえ覚えたものである。普段腰の状態があまり芳しくなく、歩く姿も時には「傷ついた大きな水鳥」のように痛々しくさえ見えたと奥野先生も、どこに故障が、と思えた程だったし、まして「踵から金貨を弾き出すが如くに歩む」榊原先生の場合は、であった。

重そうなリュック姿で学校に現れては、訝しむ先生方に「分校の重荷を背負っているのさ」とふざけては、それこそずいぶん「しょってる」と鞆を買ったりしてきたものだが、今年で終わりとハッキリ自覚し始めた頃から肩に覚える荷の重さもグングン軽やかに感じられるようになった。

大学院誕生で定年が2年延長になると判ったとき、目算が外れたさる先生、「そりゃないよ」と大いにぼやかれたものだが、今にしてみるとそのときの先生の気持ちがよく解る。察するにマラソンでこれでゴールイン！と思いきや、グラウンドをあと2周してこい、と言われたようなものだったに違いない。

足取りを軽やかにする理由や背景はそれぞれかも知れない。十分に働いた、あとは余慶を楽しみたいという余裕派も居れば、疲労困憊、氣息奄々派も居る。小生などは不完全燃焼派と言うところかな。

長い人生、「時間よ止まれ、お前は美しい」と言えるようなこともなかった訳ではないが、それも偶さかの僥倖、来し方は忸怩たるものだった。「これが人生か、さらばもう一度」と全人生を肯うことのできたかの先生のごときは、垂涎を通り越し、埒の外。「一日も千年の如し」だった幼少期は別として、物心のついた頃からは後悔先に立たずの不如意の連続だった。そんなせいも「地獄のような」結婚生活を悔いた、イヴァン・イリッチが、いまわの際に幼少のミギリを懐かしみ、その懐旧の念を慰めに息を引き取る姿は身につまされたものである。

最近小学校から大学まで同期会やら同級会とやらの案内をもらうことが多くなった。ヤイノ、ヤイノと誘ってくれるのは有り難いのだが、行ってみたいという気がまるで起こらない。「青春よもう一度」ということなのだろうが、特に蹉跎多く、鬱屈たる青春時代は少なくとも小生にとっては思っていたことよりは忘れてしまいたいことの方が多い。「もう一度」どころか「二度と」と言う方が正直なところで、「封印」してしまいたい時代をわざわざ暴き合ってどうする気なのだろうと思ったりもしてしまう。

それに比し「たまには」懐かしみたくなりそうな分だけでも岩見沢時代は楽しかったと言え言えるのかな。それでも30数年に及ぶここでの生活も、傍目にはいかに勝手放題、自由奔放に見えたとしても不如意を託つことばかりだった。特に「ガクシャ」だの「ケンキュウシャ」だのという借り着はどうにも肌に合わず、重盛への気兼ねから清盛が慌てて纏った場違いな法衣のようなものだった。普段着こそが小生にとっては晴れ着、この3月で仮初めの法衣もかなぐり脱ぎ捨て身の丈にあった・・・と思うと天にも昇る思いになる。遅きに失したとは言え、かのテツガクシャの鞆に倣って言えば、これからは幾分かでも「さらばもう一度！」と勇躍歓喜しているところです。